



特定領域研究

実験社会科学 ニュースレター

2012 年 10 月 5 日
第 7 号

この号の内容

1. はじめに
2. 「集団班における実験研究について」
集団班 高橋伸幸先生
3. お知らせ
4. 編集後記

1. はじめに

特定領域「実験社会科学」ニュースレター第 7 号では、集団班で行われている研究内容の一部を、ご紹介させていただきます。集団班では、亀田達也先生(北大)を代表として、高橋伸幸先生(北大)、中丸麻由子先生(東工大)、神信人先生(淑徳大)を研究分担者として、集団規範を可能にする感情・認知・行動のメカニズムについて、実験研究をもとに、明らかにしようとしています。

本号では、高橋伸幸先生にご依頼して、現在の研究の一部について、ご紹介させていただきます。

2. 「集団班における実験研究について」

集団班 高橋 伸幸先生

北海道大学社会科学実験研究センター・文学研究科

人間の他種との違い？

人間は、一人で生きているわけではありません。社会の中で、お互いに協力し合って生きています。道路や運河などの公共施設を建設したり、水産資源が枯渇しないように漁をしたりしています。このように、赤の他人との間で大規模な相互協力が達成可能なのが、人間がホモ・サピエンスとして他の種と最も大きく異なる点です。

相互協力を達成するためのメカニズム？

このような大規模な相互協力が如何に達成されるかという問題を定式化する方法はいくつかありますが、ここでは最も代表的な例である社会的ジレンマをとりあげることにします。社会的ジレンマ状況の簡単な説明は以下の通りです。①各個人は集団に対して協力するかしないかの二つの選択肢を持っている、②各個人にとっては集団に対して協力するよりも協力しない方が利得が大きい(ただ乗りが一番得)、③全員が非協力の場合は全員が協力の場合よりも集団全体の利得は小さい。ここでのポイントは、伝統的な経済学で想定する、無限の計算能力を持つ合理的で自己利益を最大化する人間ならば、集団に対して協力するはずがない、ということです。しかし、実際にはただ乗りをする人ばかりではありません。

"サンクション！？"

自分で犠牲を払って集団のために協力する人も少なからず存在し、それなりに高い協力率が集団全体で達成されることも珍しくありません。これは、社会には相互協力を達成するための何らかのメカニズムが備わっているためであると考えられます。その代表例がサンクションと呼ばれるものです。

サンクショニングシステムに関する研究

サンクションは日本語では「制裁」と訳されることが多いのですが、ここでは社会的ジレンマでの行動に対する賞と罰を両方含むこととします。人々の行動を一定方向に動かしたい場合、政府は大きく分けて二つの方法を用います。その方向と合致する行動をとる人に報酬を与える方法と、合致しない行動をとる人に罰を与える方法です。例えば、二酸化炭素の排出量を低減するためにエコカーに補助金を支給するのは報酬で、排ガスの多い車には重い税金を課するのは罰に当たります。このように、何らかのサンクショニングシステムが協力者には報酬を、非協力者には罰を与える例は他にもたくさんあり、それにより社会的ジレンマが解決されることも多いのです。しかし、サンクションの仕組みはこれだけではありません。今はあまり見られなくなったと言われていますが、地域共同体が実体として存在していた一昔前までは、子供が何か悪いことをすると近所のおじさんやおばさんに怒られたものです。このように、個人が個人に罰や報酬を与えることもよくあります。

世界で初めて社会的ジレンマ状況におけるサンクション行動を扱った実験は Yamagishi (1986)ですが、そこではサンクショニングシステムによる罰が研究対象でした。非協力者を罰するシステムが存在し、参加者はそのシステムに対して働かせるためにお金を払うことが可能でした。すると、参加者は実際に、サンクショニングシステムにお金を払い、それにより非協力者は罰され、その結果として社会的ジレンマでの協力率は上昇したのです。その後、21 世紀になりサンクションの研究は盛んになりましたが、経済学における多くの実験では個人サンクションが用いられています。個人サンクションとは、各個人が自分の判断で別の参加者にサンクションを与えるというものです。実験結果は再び、参加者は自発的に他者を罰するということを示しました。しかし、これら 2 種類のサンクションの仕組みを同列に扱ってよいのでしょうか？ 我々はそこに着目しました。なぜなら、第 1 に、サンクション行動の正統性はシステムの方が高いと考えられるからです。個人サンクションは、確かに相互協力達成のために必要かもしれませんが、一歩間違えると私刑や賄賂になってしまいかねません。それに対し、サンクショニングシステムに対する貢献は、それ自体がシステムに対する協力行動であると見なされる可能性が高いでしょう。また、個人サンクションを行うと他者から恨みを買う可能性があります。サンクショニングシステムに対して貢献するだけではそのような可能性は低いでしょう。なぜなら、実際のサンクションはシステムが行うからです。以上のことを考えると、人々は個人間サンクションよりもシステムサンクションの方を行いやすいのではないかと考えられます。そこでこのことを確かめるため、我々は他の条件を揃えた上で、4 種類のサンクション(システム罰、システム報酬、個人罰、個人報酬)を人々が実際にどの程度行使するのかを比較する実験を行いました。

"報酬と罰！？"

"様々なサンクション！？"

"サンクションの効率には
違いがある！？"

社会的ジレンマステージとサンクションニングステージを扱った実験研究

実験は4人1グループで行われ、社会的ジレンマステージとサンクションニングステージを交互に20回繰り返すというものでした。先行研究と同様、サンクションは自生しましたが、その程度は罰よりも報酬の方が大きいというものでした。また、協力率を比較したところ、システムサンクションよりも個人間サンクションの方が高いという結果でした。これは一見すると、サンクションが協力率を高める効果はシステムサンクションよりも個人サンクションの方が大きいということを示しているようですが、自生したサンクションの程度が異なるため、それを考慮する必要があります。そこで、条件毎に集団内のサンクションの程度が社会的ジレンマでの協力率に及ぼす影響を調べたところ、個人罰以外の3条件ではサンクションが大きくなるほど社会的ジレンマでの協力率が高かったのに対し、個人罰条件ではサンクションの程度は協力率とは無関係でした。これは、個人罰は、たとえその程度は低くても、社会的ジレンマでの協力的行動を引き出す効果が非常に強いということを示します。また、システム報酬条件でのサンクションの効果はシステム罰や個人報酬と比較すると弱く、効率の悪いものだということも分かりました。

ヒトはなぜサンクションを行うのか？

最後に、人々はなぜサンクションを行うのかを考えてみましょう。サンクションを行うためには自分でコストを払わなければなりません。従って、それを上回るだけの利益をどこから得る必要があります。その可能性の一つが評判です。サンクションを行うことにより良い評判を得ることができれば、他者より地位が高くなったり、他の場面で他者から大事に扱ってもらえるかもしれません。そこで、サンクションを行った人々についてどう思うかを尋ねたところ、罰を行使する人の評判が極めて悪いことが明らかとなりました。また、サンクション自体についてどう思うかも尋ねたところ、システムサンクション、特にシステム罰は正当化どころかお節介や嫌がらせだと思われていました。このことは、個人報酬を行うことは良いことだと思われるが、それ以外は良いことだとは思われないということを示します。従って、個人報酬以外のサンクションを人々がなぜ行うのかは、依然として謎のままです。今後、この点を明らかにする研究を行っていきたいと考えています。

3. お知らせ

カンファレンス開催のお知らせ

文部科学省特定領域研究「実験社会科学-実験が切り開く 21 世紀の社会科学-」は第 16 回実験社会科学カンファレンスを下記要領にて開催することになりました。ご案内申し上げます。

この特定領域研究は、異なる領域に属する社会科学者が「実験」を共通言語として協働し、より高い説明能力と政策提言能力を有する社会科学を構築することを目的としています。

本年度は、「行動経済学会第6回大会」との共同開催になります。社会科学諸領域で研究に携わる方々だけでなく、人間の社会性について研究をされている方々からも多くの参加をお待ちしております。

開催情報

開催主体 文部科学省特定領域研究「実験社会科学-実験が切り開く 21 世紀の社会科学-」、行動経済学会

カンファレンス情報

日時 2012 年 12 月 8 日(土)・9 日(日)

会場 青山学院大学 青山キャンパス

(〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25)

懇親会 12 月 8 日(土)

参加費 無料

懇親会費 無料

会場では無線 LAN を利用できます。当日受付で ID などを配布いたします。

論文発表申し込み

発表申し込み締切日:2012 年 10 月 31 日(水)

参加申し込み

参加申し込み締切日:2012 年 10 月 31 日(水)

特定領域研究により開催されます学会やワークショップなどの詳しい日程等、詳細は、下記の実験社会科学のホームページをご参照下さい。

<http://www.iser.osaka-u.ac.jp/expss21/index.html>

4. 編集後記

暑かった夏も終わり、秋の気配が感じられる季節になりました。

今回の第7号を刊行するにあたっては、集団班の亀田達也先生と高橋伸幸先生にご尽力いただきました。心から感謝申し上げます。

2013 年 3 月をもちまして、文部科学省特定領域研究である『実験社会科学-実験が切り開く 21 世紀の社会科学-』が終了致します。

各班での研究紹介は、残すところ文化班と理論班のみとなりました。近日中に御紹介致します。

また刊行が大変遅くなりましたことを心からお詫び申し上げます。

一般の皆様からの御意見や御質問もお受けしております。さらに、何かニュースレターで取り上げてほしい内容等も随時受け付けております。特定領域研究発行元までご連絡下さい。

特定領域研究

発行元 : 大阪大学 社会経済研究所 西條研究室

〒567-0047 大阪府茨木市美穂ヶ丘 6-1

TEL: 06-6879-8582

FAX: 06-6878-2766

E-mail: secsaijo@iser.osaka-u.ac.jp

Web page: <http://www.iser.osaka-u.ac.jp/expss21/>